

天草・島原・長崎を巡るための事前学習（第1報）

—天草，原城，島原城に関する文献研究—

香川貴志^{*1}

Preliminary Study for Visiting Amakusa, Shimabara, and Nagasaki (Part 1)

: Literature Research on Amakusa and Shimabara

Takashi KAGAWA

抄 録：野外踏査が主要な研究手法の一つになっている地理学，地域経済学，地域社会学，さらに文化人類学や民俗学などでは，私たちの生活環境を自然・人文・社会諸科学の総体として捉えるため，フィールドに立つ前の事前作業が重要な意味を持つ。そこで本授業科目（偶数年は「地理学特講」）では，一貫して事前学習における文献研究を大切にしてきた。当初は事前学習会や現地授業の詳細を記録に残していなかったものの，筆者が2002年に実施した東京エクスカージョン以来，本授業科目の前身である授業を含めて，現地授業の詳細を備忘録として残してきた。ただ，事前学習における文献研究については，長らくその要旨が整理されることはなかった。多くの成果が得られる一連の文献研究を，同じ地域を対象を定めた方々の学習や研究のために資するよう継承していくため，2012年度後期の大学院科目で試行的に文献研究の成果を整理し，2014年度以降の学部授業で同様の実績を重ねてきた。本稿には，今回のフィールドトリップ最初の訪問地域である天草を扱った文献の要旨13編，原城または島原城を扱った文献の要旨11編が格納されている。

キーワード：フィールドワーク，文献精読，文献要旨，情報共有，天草，島原

I. はじめに—文献研究の意義と本研究の目的—

私たちが仮想空間ではない現実の地域を対象として調査や研究に取り組む場合，実際に調査研究活動の舞台となるフィールドに立つ前に不可避な作業がある。その深浅や濃淡は研究分野によって微妙な差があろう。共通するのは「事前調査」「事前情報収集」「予察」などの室内作業である。作業とはいえ，その多くは過去に蓄積されてきた当該地域における研究先例の探索や文献精読である。地理学や地域経済学ならば，この作業に統計分析によってグラフや地図を作成する取組みが含まれるかもしれない。

こうした事前作業の大多数が室内で行われるため，地理学ではこれらを総称してインドアワークと称することが多い。野外調査に出かけて以降の調査研究活動は主に屋外で行われる。そのため，こうした一連の調査研究活動はしばしばフィールドワークと呼ばれる。本学のような教員養成系大学・学部には籍を置いていると，教育委員会での面談や学校現場での研究会が頻繁にフィールドワークと称される場面に遭遇する。しかし，野外での調査研究活動に慣れた者からすれば，室内での面談や研究会はインドアワークであり，決してフィールドワークではない。したがって，本稿および香川（2026a, 2026b）で扱う内容はインドアワークの成果であり，香川（2026c）で扱う内容がフィールドワークに相当する。

ところで，学部学生の卒業論文や大学院学生の修士論文（修士論文に相当する教職大学院での学位請求論文）を読んでいると，自身の論文の目的を記すまでの研究系譜の位置づけが弱い論文が散見される。その多くには，参考文献の大多数もしくはすべてが単行本であるという共通する特徴が認められる。しかし，学術の世界において最新の研究成果が単行本に載っていることは稀有で，単行本の多くは過去の研究成果を再構成した著作である。したがって，著作が世に問われた時点での最新の研究動向や研究内容を参照するには，「論文」と認知されるよ

^{*1} 京都教育大学

うな学術専門誌や特定分野の商業誌に掲載された文献に触れておく必要がある。筆者は自身の地理学ゼミに属している学生たちには、学部と大学院を問わず「単行本で研究の流れを大観するのは良いが、研究手法や論文執筆作法を学べるのは学術論文が最適である」と常々指導してきた。

演習（ゼミ）や「地理学概論」における平素の授業で学術論文を中心とした文献研究の大切さを説いてはいるものの、その具体例を示す機会は決して多くない。なぜなら、個々の学生の状況に応じて指導や助言の内容は異なるし、学生たちが取り組んでいる研究の対象地域も多彩であるからである。文献研究の実例を示すには、指導する立場にある大学教員が自らの著す学術論文で模範を示す、あるいは授業で訪問する地域に関する文献研究の成果を学生とともに整理するのが適切だと思われる。ただ、学生自らが訪問経験のある地域が対象になっていることは稀なので、訪問地域について書かれた文献を厳選したうえで、それらの精読により訪問地域を事前に理解しておくことで現地での教育効果が高まると期待される。

このような観点のもと、筆者が従来まとめてきた下記の著作と同様、本稿の目的を特定地域（今回は天草・島原・長崎）についての基礎文献の要旨集の編集とした。もちろん、要旨集をまとめる狙いは、同じ地域を訪問したり研究したりする後学の利便に資することにある。

このような目的のもと、筆者は「地理学研究」（奇数年開講）と「地理学特講」（偶数年開講）で訪問する地域についての文献研究の成果としてまとめた文献要旨集を 2014 年以降に毎年残してきた。本稿の本文末尾に添えた文献表には 2000 年以降の著作についての書誌情報を記している。2020 年から古い順に対象地域を添えて列挙すると、会津（香川：2020）、中山道木曾路（香川：2021a, 2021b）、出雲・石見（香川：2022a, 2022b）、丹後半島・舞鶴（香川：2023a, 2023b）、三陸被災地（香川：2024a, 2024b）、小豆島（香川 2025a, 2025b）、天草・島原・長崎（香川：2026a, 2026b）となる。

なお、今回に先立って本学では、本授業科目の前身となる別名称の授業を含めて過去 4 度の長崎訪問を果たしている。そのうち学部授業（立命館大学と共同で 2000 年に実施）が 1 回、大学院の小規模授業が 1 回あるが、いずれも詳細な記録は残していない。他方、2006 年と 2013 年に実施した授業の備忘録は香川（2007, 2014）にまとめている。ただし、これら 2 回のフィールドトリップでは、事前学習では文献研究に取り組んだものの、記録としての文献要旨集は作成していない。

また、今年度が筆者の定年退職前で最後の授業担当となる。そのため、文献研究の細かな手法については、タイムパフォーマンスを極限まで高めた取組みを継承していけるよう香川（2026a）を執筆した。そして、紙幅の制約により本稿に格納できなかった文献要旨については、香川（2026b）の付録に添えた。さらに、今回の授業の備忘録を香川（2026c）にまとめた。2002 年実施分以降で筆者が担当した全てのフィールドトリップの備忘録や文献要旨集の一覧も香川（2026c）の第 1 表に示した。本稿および続編（香川 2026b）と併せ、天草・島原・長崎を扱う際に活用いただければ幸いである。

Ⅱ. 文献研究の対象とした地域および事象

今回の現地授業は、天草（下島）、島原半島、長崎（中心市街地および端島）を巡るエクステンシブ型とインテンシブ型を織り交ぜたフィールドトリップである。そのため、文献研究の対象とする地域や事象を相応に絞り込む必要がある。そこで次に記した「 」内のキーワードで検索する 8 カテゴリーに文献をグループ化した。本稿の抄録で述べたように、これらは自然・人文・社会の諸科学を広くカバーする環境研究に他ならない。

- ① Am カテゴリー（5編）：「天草 崎津」「天草 崎津」（後者は異体字の「崎」）「天草空港」
- ② At カテゴリー（8編）：「天草 観光」
- ③ Cs カテゴリー（11編）：「原城」「島原城」
- ④ Uz カテゴリー（10編）：「雲仙岳」「雲仙普賢岳」「雲仙・普賢岳」
- ⑤ Nf カテゴリー（7編）：「長崎大水深」
- ⑥ Ns カテゴリー（18編）：「長崎 斜面市街地」「長崎 斜面住宅地」

- ⑦ Ts カテゴリー (9編) : 「長崎県高島」「長崎市高島」
- ⑧ Hs カテゴリー (8編) : 「端島」(軍艦島の正式名称)

上に示した8カテゴリー, 計76編の文献を受講生45名の各自が全カテゴリーから1編ずつ計8編を精読し, 無償ダウンロードができないため収集に手数を要する文献は筆者が精読を担当して, 各々の受講生が経済的な負担なく全ての訪問地域についての文献に触れることができるよう配慮した。

Ⅲ. 負担の平準化および平常点評価への工夫

前章に記した8つのカテゴリーの全てを各自が1編ずつ読めるようにすると同時に, 担当する文献の総頁数に可能な限り多寡が生じないよう負担の平準化を図った。これはかなり骨の折れる作業で, 一日あたり相応の時間を費やしても数日間を要する作業となる。また, 過去に何件かあったように, 担当する文献を読み切れずに受講を取り消す者, 文献要旨の提出締切日(2025年7月18日)に間に合わない者の発生が懸念される。こうした事態によって「穴」が開いてしまうと, 突然に精読と要旨執筆の作業が筆者を襲ってくることになる。

筆者は現地での説明等のために全ての文献を読むことにしている。しかし, 受講生から提出された要旨に漏れなく目を通し, その中から比較的仕上り良好なものを選別して推敲作業に勤しみ, さらに個々の要旨を一冊の文献要旨集に編集してから印刷・製本に及ぶのはかなりの負担になる。また, 複数の受講生が同一の論文を別の観点や表現により整理した要旨がなければ比較の観点からの評価が難しくなる。そのため, 受講生が精読を担当する文献については, 1編あたり最低2名が担当するように分配してリスク回避を図っている。評価の具体については香川(2026a)に譲ることにしたい。

このような観点により各々の受講生が担当する文献パッケージを整理したのが, 次頁から4頁にわたって表頭・表側分割で示した表1である。表1と同じ内容の印刷物は, 上述した個々の文献パッケージを担当する受講生を決める第1回事前学習会の際に受講生へ配布した。各々の受講生は, 本稿付録の文献要旨のうち書誌情報(Reference)が明記された作業シートと表1を照合しながら要旨を整理する作業に勤むことになる。

受講生が整理する要旨とキーワードは, 当該論文に両者が記載されているケースは転載や微調整を認めた。しかし, 前章に記した各カテゴリーの検索語は重複を避けるため割愛するよう命じた。また, キーワードは作業シート上で1行以内に, 要旨は必ず5行で記す(4行や6行は認めない)との制約を付した。ただ, 本誌の組版との関係により, 本稿の付録(文献要旨集)では要旨が6行で表記されている。

なお, 紙幅の制約により, 本稿には前章に記したAm, At, Csの3カテゴリー・24編の要旨を収録している。残りのUz, Nf, Ns, Ts, Hsの5カテゴリー・52編の要旨については, 本稿の姉妹編である香川(2026b)を参照いただきたい。次頁から4頁(見開き2組)には, 文献パッケージの設定についての表, それに続けて本稿の参考文献, さらに上述した文献要旨(天草, 原城と島原城に関するもの)を掲載している。

謝辞

本稿と姉妹編の第2報(香川:2026b)の執筆に際し, 訪問地域の事前調査において現地の各教育委員会の皆様, 文献収集では京都教育大学附属図書館の職員の皆様に多大なお力添えをいただきました。訪問地域の予備調査の際には, JSPSの2021~2025年度科学研究費基金(基盤研究(C))「小学校社会科副読本を活用した地理・地理学教育の裾野拡大とボトムアップ」(研究代表者:香川貴志, 課題番号:21K01044)を使用しました。お世話になった上述の方々や機関・制度に対して, 末筆ながら記して御礼申し上げます。なお, 本研究で紹介した授業実践上の工夫については, 2025年8月24日に筑波大学で開催された2025年度日本地理教育学会大会において発表しました(筆者の体調不良により発表要旨のみでの参加)。また, タイムパフォーマンスを最大化する文献精読の方法については2025年9月21日に弘前大学で開催された日本地理学会秋季学術大会・東北地理学会秋季学術大会の合同大会において発表しました。

表1 文献精読のための分担割り振り(男性担当者、つづき)

分類 番号	所 蔵	頁 数	M 01	M 02	M 03	M 04	M 05	M 06	M 07	M 08	M 09	M 10	M 11	M 12	M 13	M 14	M 15	M 16	M 17	M 18	M 19	M 20	M 21	M 22	M 23
Ns10	W	8												●											
Ns11	W	7													●										
Ns12	W	11															●								
Ns13	W	7						●																	
Ns14	W	7	●													●									
Ns15	R	6																							
Ns16	R	6																							
Ns17	W	7																						●	
Ns18	W	13							●																
Ts01	W	13			●								●								●				
Ts02	W	9					●								●								●		
Ts03	W	12							●								●								●
Ts04	W	17		●								●								●					
Ts05	W	6								●								●							
Ts06	W	23				●								●								●			
Ts07	W	22						●								●								●	
Ts08	R	8																							
Ts09	W	31	●								●								●						
Hs01	W	28					●		●						●		●						●		●
Hs02	W	13	●	●							●	●							●	●					
Hs03	R	10																							
Hs04	R	27																							
Hs05	W	7			●	●		●		●			●	●		●		●			●	●		●	
Hs06	R	19																							
Hs07	R	6																							
Hs08	R	6																							
担当	頁	数	1 0 7	1 0 8	1 0 7	1 0 7	1 0 8	1 0 9	1 0 8	1 0 9	1 0 9	1 0 8	1 0 7	1 0 9	1 0 7	1 0 9	1 0 8	1 0 8	1 0 9	1 0 8	1 0 7	1 0 9	1 0 7	1 0 9	1 0 7

表中の凡例(左右の両頁で共通)

【精読担当者の属性と整理番号】

M: 男子学生(学部3~4回生、大学院M1およびM2)

F: 女子学生(学部2~3回生、大学院M1)

注) 男子学生の学部2回生, 女子学生の学部4回生と大学院M2生はいなかった。

【文献分類】

Am: 崎津集落・天草空港, At: 天草観光, Cs: 原城・島原城,

Uz: 雲仙普賢岳, Nf: 長崎大水害, Ns: 長崎斜面市街地,

Ts: 長崎県高島・長崎市高島, Hs: 端島(軍艦島)

表1 文献精読のための分担割り振り (女性担当者および香川、つづき)

分類 番号	所 蔵	頁 数	F 01	F 02	F 03	F 04	F 05	F 06	F 07	F 08	F 09	F 10	F 11	F 12	F 13	F 14	F 15	F 16	F 17	F 18	F 19	F 20	F 21	F 22	香 川	
Ns10	W	8													●											
Ns11	W	7														●										
Ns12	W	11								●								●								
Ns13	W	7							●																	
Ns14	W	7		●																						
Ns15	R	6																							◇	
Ns16	R	6																							◇	
Ns17	W	7															●									
Ns18	W	13	●																							
Ts01	W	13				●								●									●			
Ts02	W	9														●										
Ts03	W	12						●		●								●						●		
Ts04	W	17			●								●								●					
Ts05	W	6	●								●								●							
Ts06	W	23					●								●								●			
Ts07	W	22							●								●									
Ts08	R	8																							◇	
Ts09	W	31		●								●									●					
Hs01	W	28						●		●						●		●						●		
Hs02	W	13	●	●	●							●	●								●	●				
Hs03	R	10																							◇	
Hs04	R	27																							◇	
Hs05	W	7				●	●		●		●			●	●		●		●				●	●		
Hs06	R	19																							◇	
Hs07	R	6																							◇	
Hs08	R	6																							◇	
担当	頁 数		1 0 9	1 0 7	1 0 7	1 0 7	1 0 9	1 0 9	1 0 7	1 0 8	1 0 8	1 0 9	1 0 8	1 0 7	1 0 9	1 0 7	1 0 9	1 0 8	1 0 8	1 0 9	1 0 8	1 0 7	1 0 9	1 0 9	3 3 5	

表中の凡例 (左右の両頁で共通)

【(文献の) 所蔵または入手先】

- W DOI, J-Stage, IR (機関リポジトリ) などWeb経由で入手可能。
- L 学内 (附属図書館) や地理学研究室, 香川研究室で入手可能。
- R 他機関 (他大学や公立図書館) へ複写申請して入手可能。

【各々の文献の入手及び担当】

- ★ 地理学研究室所蔵のものを入手・担当する文献
- 各自が入手・担当する文献 (香川が推敲)
- ◇ 香川が入手・担当する文献

引用・参考文献（本稿付録および香川（2026b）付録に掲出した計76編の文献は割愛）

- 香川貴志（2007）長崎ば，さるかんね．『京都教育大学教育実践研究紀要』，7，pp.1-10.
- 香川貴志（2014）長崎ば，さるかんね2．『京都教育大学教育実践研究紀要』，14，pp.11-20.
- 香川貴志（2020）福島県内の重要伝統的建造物群保存地区および会津若松に関する基礎文献とその要旨．『京都教育大学環境教育研究年報』，28，pp.53-64.
- 香川貴志（2021）重要伝統的建造物群保存地区を活用した教材作成のための事前学習の記録—中山道妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢に関する文献研究—．『京都教育大学教育実践研究紀要』，29，pp.1-12.
- 香川貴志（2022a）出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第1報）—近年に著された対象地域の地理学関連文献の要旨—．『京都教育大学教育実践研究紀要』，30，pp.57-72.
- 香川貴志（2022b）出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第2報）—近年に著された対象地域の地理学関連文献の要旨—．『京都教育大学教育実践研究紀要』，30，pp.73-86.
- 香川貴志（2023a）「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第1報）—丹後半島全般，京都丹後鉄道，与謝野町—．『京都教育大学環境教育研究年報』，31，pp.39-53.
- 香川貴志（2023b）「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第2報）—舞鶴市，宮津市，京丹後市，伊根町—．『京都教育大学環境教育研究年報』，31，pp.55-69.
- 香川貴志（2024a）津波被害からの復興を学ぶための事前学習（第1報）—三陸ジオパーク，石巻市大川小学校跡，南三陸町—．『京都教育大学環境教育研究年報』，32，pp.33-45.
- 香川貴志（2024b）津波被害からの復興を学ぶための事前学習（第2報）—陸前高田市，釜石市，大槌町，山田町，宮古市田老—．『京都教育大学環境教育研究年報』，32，pp.47-58.
- 香川貴志（2025a）小豆島の地域産業を学ぶための事前学習（第1報）—主にオリーブ関連産業および醤油醸造業について—．『京都教育大学環境教育研究年報』，33，pp.37-50.
- 香川貴志（2025b）小豆島の地域産業を学ぶための事前学習（第2報）—素麺製造業，製塩業，交通および観光，産業一般・農業，壺井栄『二十四の瞳』について—．『京都教育大学環境教育研究年報』，33，pp.51-60.
- 香川貴志（2026a）フィールドトリップに向けた成果共有による効果的な文献研究の提案—天草・島原・長崎を対象として—．『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』，8，pp.99-108.
- 香川貴志（2026b）天草・島原・長崎を巡るための事前学習（第2報）—雲仙岳，長崎，高島，端島（軍艦島）に関する文献研究—．『京都教育大学環境教育研究年報』，34，pp.25-39.
- 香川貴志（2026c）天草・島原・長崎の世界文化遺産を巡るフィールドトリップ—2025（令和7）年度「地理学研究」および「社会科教育実践演習・地理-」（大学院）の覚え書き—．『京都教育大学環境教育研究年報』，34，pp.41-55.

付録（事前学習で扱った文献の要旨）

受講生が要旨執筆とキーワード選定を担当する文献は，経済的な負担を避けるため，他大学等から取寄せる必要があるものは避け，本学所蔵資料，DOIやIR（機関リポジトリ）で無償ダウンロードできるものに限った。なお，すべての文献要旨とキーワードは，香川による推敲を経ている。また，各文献のコード番号に添えたアルファベットは，文献入手に関わる情報で次のような意味がある。DOI：DOIを経由して入手可，IR：機関リポジトリで入手可，LB：本学附属図書館または地理学研究室で所蔵，NDL：国立国会図書館デジタルコレクション，Re：附属図書館経由で他大学等から取寄せ。

「天草 崎津」「天草 崎津」または「天草空港」で検索してヒットする文献のうち地理学に関係が深いと判断した5頁以上のものを厳選のうえ掲出した。

Am01 IR, 17p.

Reference：東 昇（2008）. 文化二年「天草崩れ」と宗門改帳—肥後国天草郡崎津村文書を中心に—. 京都府立大

学術報告 人文・社会, 60, 69-85.

Keywords : 天草崩れ, 宗門改帳, キリシタン, 嶋津村, 長沼賢海

Abstract : 本論文は, 1805年に発生した「天草崩れ」と呼ばれる隠れキリシタン摘発事件を, 肥後国天草郡嶋津村の村落文書を主な史料として用いながら分析した研究である。今富村周辺における牛殺しの噂を契機として, 島原藩は村々で臨検や説法を行い, 多数のキリスト教信者が摘発されるに至った。事件は「宗門心得違い」として処理され, 被摘発者は絵踏を課されるにとどまった。本研究は, 宗門改帳と村落文書の分析を通じて, 江戸後期における宗教統制がいかに行われたのかの実態や, 隠れキリシタンの存在と彼ら/彼女らへの対応が明らかにされている。

Am02 Re, 5p.

Reference : 天草空港管理事務所 (2024). がんばる地方空港 イルカが空を飛ぶ—天草空港—. 小型機と安全運航, 113, 41-45.

Keywords : みぞか号, 地域医療, 安全対策, 地域活性化, 観光振興, イルカウォッチング

Abstract : 2000年3月に開港した天草空港は, 滑走路が1,000mで小型機しか発着できないものの, 陸路での結節性に劣る天草地域にとって, 地域医療の医師派遣などで生命線でもある高速交通インフラである。発着する航空会社は機体にイルカを描いた「みぞか号」を所有する天草エアラインで, 同社はフランス製のATR42型1機で福岡3往復, 熊本経由の伊丹1往復の10フライトをこなす。空港を管理する熊本県は安全対策にも余念がない。イルカウォッチングをコアにした観光振興による地域活性化にも地元経済界が一体となって積極的に取り組んでいる。

Am03 IR, 18p.

Reference : 田口宏明 (1986). 人口の社会動態からみた地域社会の変化—天草下島河浦町のばあい—. 文学部論叢, 20, 13-30.

Keywords : 河浦町, 社会変化, 労働力市場, 停滞的過剰人口, 農民層分解, 天草炭田

Abstract : 本稿は, 天草郡河浦町(現・天草市河浦町)を事例に, 人口の社会動態の変容から戦後の地域社会の理解につなぐ予備作業的な分析である。戦後, 天草では元出寄留者により人口が急増し, それが地域内の「天草炭田」の労働市場に吸収され, 人口減少の開始が他地域より遅れた。しかし1960年代, エネルギー革命による炭鉱の閉山が引き金となり, 地域労働市場は崩壊する。過剰人口は全国市場へ急激に流出し, 同時に閉山後, 労働者の受け皿の役割を果たしていた農民層の分解も進行した。その後人々は, 低賃金型農外労働力市場に吸収された。

Am04 Re, 9p.

Reference : 前 光祝 (2022). 日本の空港はいま (第29回) 天草地域の地方創生と天草空港の活性化に向けた連携。ていくおふ, 168, 41-49.

Keywords : 第三セクター, 高速交通空白地帯, 地方創生, 交流人口, 地域連携, 空港利用促進

Abstract : 熊本県による「県内90分構想」を基盤として2000年に天草空港開港と第三セクター航空会社の天草エアラインの就航がなされ, 熊本から2時間以上を要する天草市と苓北町は高速交通空白地帯からの脱却を図ることとなった。この事業は単なる空港や航空路線の開設に留まらず, 多様な地域資源を活用した交流人口の掘り起こしによる地方創生の目標を持っている。この目標を達成するために地域の様々な産業が協力する地域連携体制の確立や強化が図られており, 天草エアラインが旅行業登録するなど官民一体となった空港利用促進が模索されている。

Am05 DOI, 21p.

Reference : 鎧塚典子・山本祐大・島 英浩・形田夏実・吉田国光 (2015). 熊本県天草市崎津における漁村景観維持の背景—保全活動と生業変化に着目して—. 地理科学, 70(1), 1-21.

Keywords : 景観保全, 漁村景観, 文化財, 非経済的動機, 生業

Abstract : 本稿は, 熊本県天草市崎津地区崎津を事例に, 「カケ」「トウヤ」と呼ばれる構造物を特徴とする漁村

景観が維持されてきた背景の解明を試みた研究である。崎津における景観保全に関する取組みは、道路の整備等に代表されるハード面を整えるところに端を発する。その後、漁村景観が重要文化的景観に選定されることを目指すなかで、漁家数の減少が影響して生業としての漁業の存続という維持は、文化財として漁村集落の維持へと転化した。集落の維持には経済的負担が不可避であるが、地域住民の非経済的動機に支えられているのが実情である。

「天草 観光」で検索してヒットする 2000 年以降の文献のうち地理学に関係が深いと判断した 7 頁以上のものを厳選のうえ掲出した。

At01 Re, 36p.

Reference : 香川正俊 (2002). 地域航空と地域振興—天草エアラインと天草観光を中心に—. 産業経営研究, 21, 1-36.

Keywords : 地域航空, 天草エアライン, 地域振興, 熊本路線, 空港効果, 周遊型観光ルート

Abstract : 本稿は、地域航空会社として自治体の支援を受けて設立された天草エアラインの経営体質を明らかにし、同社が地域振興に向けて一層の貢献を果たせるよう模索した研究である。わずか 1 機で運行する同社は利用好調な福岡路線に対し、首都圏や近畿圏からの航空便との接続に劣る熊本路線の利用が低迷している空港効果は熊本に近い上島地域で相対的に低く、同地域では空路利用のメリットも小さい。将来に向けては、地元客やビジネス客だけをターゲットにせず、周遊型観光ルートの形成を天草全域で図るなどの官民共同の取組みが必要不可欠である。

At02 DOI, 8p.

Reference : 後藤洋政・幕 亮二・中村彰宏 (2021). 地域航空路線振興に向けた実証的アプローチと検証—天草路線と五島福江路線のケース—. 交通学研究, 64, 147-154.

Keywords : 地域航空路線, コンジョイント分析, 潜在需要, 二次交通, 旅行目的別戦略

Abstract : 本論文は、地域航空路線の利用促進を目的に、福岡＝天草、福岡＝五島福江の 2 路線を対象に、コンジョイント分析を用いて旅客の選好を調査・分析した研究である。アンケート調査の結果、観光目的の利用者は航空便の時間帯や現地での二次交通サービスに対して有意な選好を示すのに対し、ビジネス目的の利用者はそれらへの関心が低いことが解明された。とりわけ観光客に対しては、交通手段や旅行パックの工夫により需要を喚起できる可能性が示された。今後の路線維持や活性化に向け、需要の属性を考慮した施策の大切さが強調されている。

At03 IR, 12p.

Reference : 酒井孝寛・坂田 治・伊預 泉 (2013). 天草の里海保存に向けたネットワークの構築—連携とシールが支える新たな里海保存活動—. 熊本大学政策研究, 4, 115-126.

Keywords : 里海保存, 地域連携, 資金調達, 持続可能な地域社会

Abstract : 本論文は、熊本県天草地域における里海の保全と継承を目的とした新たな取組みを提案している。天草地域は、漁業、加工業、観光業、飲食業などが里海の恩恵を取り込むことで発展してきた。しかし、近年では地球温暖化による海洋環境の変化が顕在化し、水産資源の減少、漁業者の高齢化や後継者不足など、多様な課題に直面している。こうした課題の解決や緩和に向けて、様々な組織の創設や取組みがなされている。その具体例を挙げると、①天草里海保存コンソーシアムの設立、②里海保存シールの発行と里海保存協力基金の創設を指摘できる。

At04 DOI, 10p.

Reference : 佐々木大和・田中尚人 (2023). 天草市五和町二江地区におけるエコツーリズムの持続可能性に関する研究. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 78(5), I_307-I_316.

Keywords : 地域資源, エコツーリズム, イルカウォッチング, エリアケイパビリティ, 価値認識

Abstract : 本研究は、地域資源を活かした地域振興の一つとしてエコツーリズムを取り上げ、天草市五和町二江

地区におけるイルカウォッチングを例にとり、エコツーリズムの持続可能性を論じている。その観点としてエリアケイパビリティという観点が述べられており、当該資源が持つ潜在力を高めながら持続的利用を促進し、地域の生業やコミュニティの連携を強化することが地域の持続的発展に重要であると主張されている。同地域におけるイルカウォッチング事業は1993年に移住者からの提案を受けて始まり、様々な変遷を経て現在の状況に至っている。

At05 DOI, 7p.

Reference : 辻本千春 (2012). ヘルスツーリズムの展開における拠点と要因に関する一考察—天草と室戸の事例から—. 日本国際観光学会論文集, 19, 83-89.

Keywords : 余暇, 健康, 観光, タラソセラピー, 療養, 宿泊

Abstract : 本稿は、天草と室戸（高知）という海洋に面した地域を事例として、ヘルスツーリズムの発展について考究した研究である。発展を促す要因は主に次の3点にまとめられる。1つ目は、宿泊施設やスパなど、健康体験の基盤としての拠点施設の利用である。2つ目は、タラソセラピーや温泉などの身体を癒す療養資源の利用である。3つ目は、マラソン・ウォークなど、体験型プログラムを軸にした健康イベントの実施である。これらがバランス良く連携していると、単なる観光ではなく、「健康価値」を提供するヘルスツーリズムが確立されると述べている。

At06 IR, 10p.

Reference : 長谷部俊之 (2011). 天草市の観光の課題について—観光の経済波及効果および関連産業の域内調達率からの分析—. 熊本大学政策研究, 2, 95-104.

Keywords : 経済波及効果, 域内調達率, 観光政策, 雇用効果, 天草市活性化

Abstract : 本稿は、少子高齢化や人口流出など多くの課題を抱えた熊本県天草市において、観光が地域活性化の鍵を握るとの前提のもと、2008年の観光による経済波及効果と観光関連産業の域内調達率（自給率）を分析した研究である。観光による生産・所得・雇用・税収の各効果は大きい一方、その大半は「直接効果」に偏り、市内での経済循環が不十分であることが判明した。とりわけ農林水産業や商業の域内調達率が低く、観光消費が市外に流出している。今後は地元産業との連携強化を図り、消費の域内循環を促進する施策が要請されると結論付けている。

At07 DOI, 12p.

Reference : 深見 聡 (2017). 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺跡」とダークツーリズム. 観光学評論, 5(2), 185-196.

Keywords : 潜伏キリシタン関連遺跡, ダークツーリズム, 相互啓発, 環境教育, 科学コミュニケーション

Abstract : 本論文は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺跡」を事例に、ダークツーリズム研究の可能性を論じたもので、長崎観光、日本における世界遺産観光に生じる質的变化、ホストとゲストの偶然による相互啓発の視点から見通しを立てた論考である。研究を通じて、潜伏キリシタン関連遺産においてダークツーリズムの観点を取り入れることは、ホストとゲストの双方にとって有用であると確認できた。それゆえ、科学コミュニケーションとしてのダークツーリズムという言葉が浸透させ、その実質化を図りつつ相互啓発を促すことが不可欠である。

At08 DOI, 12p.

Reference : 馬 夢妍・羽島剛史・小林潔司 (2016). 天草南蛮文化のオーセンティシティと観光開発. グローバルビジネスジャーナル, 2(1), 29-40.

Keywords : オーセンティシティ, 観光, 舞台, 天草南蛮文化

Abstract : 本稿は、観光社会学におけるオーセンティシティ論を整理し、文化観光におけるオーセンティシティと商品化の関係について考察した研究である。観光空間において、観光客向けの空間である表舞台の不成熟な文化製品、地元居住者に向けた裏舞台にある成熟した文化の峻別により、文化保護と文化イノベーションの両方を達成できる可能性がある。天草南蛮文化を事例に、文化観光を舞台化し、天草南蛮文化の根源的な要素と

今日的な要素の双方をバランス良く配合しながら文化的オーセンティシティを構築するための方法が検討されている。

「原城」「島原城」で検索してヒットする2000年以降の文献のうち地理学に関係が深いと判断した6頁以上のものを厳選のうえ掲出した。同一著者による一連の著作については、最も新しい文献で代表させたケースもある。

Cs01 Re, 6p.

Reference : 煎本増夫 (2009a). 島原・天草の乱—信仰を希求したキリシタンの戦い (第 22 回) 第十五章 原城ついに落城 (1). 歴史読本, 54(10), 282-287.

Keywords : 島原・天草の乱, 乱, 落城, 兵糧攻め, 一揆軍, 幕軍

Abstract : 現在は廃刊されたKADOKAWAの一般向け啓蒙雑誌『歴史読本』に「島原・天草の乱」をテーマに連載された記事のうち、原城の落城に関する部分であり、下記の54(11)に掲載された記事の全編にあたる。松平信綱の陣屋で開催された水野勝成(備後国福山城大名)が列席した軍議の様子、兵糧攻めを旨としながらも、出丸に一揆軍不在との情報を掴んだ鍋島軍が抜駆を企てて総攻めを一日早めたこと、鍋島軍はもとより細川軍や黒田軍にも少なからぬ戦死者が出た攻防の激しさが著者の知識を基盤として展開される。ただ、史料は列挙されていない。

Cs02 Re, 7p.

Reference : 煎本増夫 (2009b). 島原・天草の乱—信仰を希求したキリシタンの戦い (第 23 回) 第十五章 原城ついに落城 (2). 歴史読本, 54(11), 276-282.

Keywords : 島原・天草の乱, 落城, 兵糧攻め, 一揆軍, 幕軍, 天草四郎時貞

Abstract : 上述の『歴史読本』54(10)の記事の続編にあたる短編である。ここでは原城の落城に至る最終局面が描かれるとともに、我われが現地を訪ねた際に目にすることができる池尻口門跡や天草四郎時貞の墓碑などが写真で明示されるなど、ビジュアルな構成も取り入れられている。前編に記された1638(寛永15)年2月27・28日の総攻めでの幕軍死傷者数を大名別に計上した表をみると、その総計は8,000人近くにも及ぶ。こうした戦闘が生じた背景に宗教弾圧があったことは自明であり、島原・天草の乱が一種の広域宗教戦争であったことを理解できる。

Cs03 Lb, 11p.

Reference : 大平晃久 (2025). 原城跡の記憶と顕彰. 歴史地理学, 67(1), 3-13.

Keywords : モニュメント, 原城, 世界遺産, 記憶, キリスト教

Abstract : 本稿は、長崎県南島原市の原城跡を事例として、第二次世界大戦後におけるモニュメントを中心とした記憶と顕彰の変遷を解明した論考である。まず、モニュメントが史跡整備・観光化の手段として設置された一方、世界遺産登録の過程でその撤去が争点化した経緯を示す。さらに、一揆戦死者の慰霊が、子孫や後継者の不在により「未完遂」であるとの認識から、今なお新たなモニュメント設置が続く特異な状況を分析している。この事例を基盤として、モニュメントが場所の演出に果たす役割や、問題の未解決性が建立を継続させる可能性を論じている。

Cs04 IR, 15p.

Reference : 小西瑞恵 (2007). 埋(うず)もれた十字架—天正遣欧使節と黄金の十字架. 大阪樟蔭女子大学学芸学部論集, 44, 19-33.

Keywords : 天正遣欧使節, 黄金の十字架, 原城跡, 隠れキリシタン

Abstract : 本論文は、16世紀末にヨーロッパへ派遣された天正遣欧使節が持ち帰ったとされる「黄金の十字架」の行方を追い、長崎県南島原市の原城跡で発見された金製の十字架との関連性を探るもの研究である。4人の少年が中心となった天正遣欧使節が持ち帰ったとされる黄金の十字架は、その後の歴史的背景の中で行方不明となっていた。しかし、原城跡で発見された金製の十字架が、彼らの持ち帰ったものと関連している可能性がある」と指摘されている。発見された十字架を様々な観点から詳細に分析し、天正遣欧使節の遺産としての意義

を再評価している。

Cs05 Re, 18p.

Reference : 高田 徹 (2019). 元和・寛永期の城郭に関する諸問題—備後福山城, 肥前島原城を中心に—.
織豊期研究, 21, 79-96.

Keywords : 元和・寛永期, 築城技術, 一国一城令, 武家諸法度, 備後福山城, 肥前島原城

Abstract : 本稿は, 元和・寛永期に築かれた備後福山城と肥前島原城の構造を主に分析し, 逐次他の城郭とつも比較しつつ, 当期の城郭の特徴を導出しようと試みた論考である。当期には天守を持たない城郭があり (天守台の身を有する城郭を含む), このことを根拠に築城技術が衰退したと見做すこともあるが, 大砲戦に備えた天守を持っていた福山城 (島原城については不明) の構造からして, 築城技術の停滞や衰退は考えにくい。その背景を成す社会環境として, 一国一城令や武家諸法度の影響により, 優れた軍事性をもつ城郭が希求されたことを考え得る。

Cs06 Re, 7p.

Reference : 高村雅彦 (2019). 「水の文化」先進研究 城下町と水の聖地 島原城下町を「水の聖地」から読み解く。
ミツカン水の文化センター機関誌, 63, 38-44.

Keywords : 水の聖地, 都市領域, 環境領域, 島原城, 湧水, 島原大変, 白土湖

Abstract : 紀行文的な仕上がりの中にも自然地理学的, さらに歴史的な視点から島原城下の特質の解明に努めた本稿は, 伏流水や湧水帯を媒介にして島原を理解するのにつ公的な論考である。当地は雲仙岳の噴火で度重なる被害を受けてきたが, 噴火による災害は当地に水の恵みをもたらし, 島原を「水の聖地」たらしめている。この地の聖なる水は, 雲仙岳に近い「聖地」から外側に向かって都市領域と環境領域が順に展開する。湧水帯の多くは都市領域にあり城下の形成や産業の育成に貢献したが, 島原大変で生じた白土湖は大量の水が湧き出す水源でもある。

Cs07 DOI, 12p.

Reference : 武田昌憲 (2014). 絵図は何を「物語る」か. 尚綱大学研究紀要A 人文社会科学編, 46, A15-A26.

Keywords : 宗教画, 社会的メッセージ, 仏教説話図, 歴史的文脈

Abstract : 本稿では, 絵図をが視覚的な図像に留まらず, 時代背景や制作者の意図, 社会的・宗教的メッセージを伝える「語り」の媒体として捉えられている。絵巻や仏教説話図などの絵図は, 構図や場面選択を通じて教化や道徳的メッセージを表現しており, 当時の人々 (観る者) の価値観をも反映している。こうした絵図は, 物語を再構築する装置として機能するため, 歴史や文化を理解する際の手がかりとなる。その一方で, 現代の鑑賞者がその背景と縁遠い中, 絵図の「物語」を正しく読み解くには専門的な知識や注釈が必要であることが指摘されている。

Cs08 Re 16p.

Reference : 服部英雄 (2007). 原城の戦い. 海路, 4, 103-118.

Keywords : 日野江城, キリシタン大名, 有馬晴信, 発掘調査, 援軍, ポルトガル

Abstract : 本稿で扱われる原城は, キリシタン大名である有馬晴信の城郭で, 領域内に日野江城も存在した。原城の顕著な形態的特徴として「海に向けた門」(田尻門と蓮池門) の存在を挙げることができる。本稿では発掘調査の成果を適宜引用しつつ論が展開する。年貢の取り立てと宗教弾圧に耐え切れない農民たちが蜂起するに至り, やがて彼らは籠城に至った。無謀とも思える籠城戦術は兵糧を豊富に持っていたことに加え, 同じキリシタンとして他藩やポルトガルの援軍が海から来てくれることに期待していたのではないかというのが著者の見立てである。

Cs09 Re, 6p.

Reference : 濱口和久 (2021). 島原城と島原半島の災害. 翼 (航空自衛隊連合幹部会機関誌), 45, 58-63.

Keywords : 有馬晴信, 松倉重政, 島原の乱 (島原天草一揆), 島原大変, 普賢岳, 火砕流

Abstract : 有馬晴信の自刃後, 有馬氏はやがて日向国へ転封となり, 関ヶ原や大坂で名を挙げた松倉重政が島原

を統治するようになった。1618（元和 4）年から 6 年をかけて完成した島原城はキリシタン対策も奏功して分限以上の規模となったが、その後の圧政が島原の乱（島原天草一揆）を勃発させた。天草四郎率いる一揆軍は原城址に籠城するも落城した。1792（寛政 4）年の島原大変、1991（平成 3）年の普賢岳大噴火により島原は地震や火砕流で大被害を受けたが何とか復興を遂げた。現在は島原城が 1960～80 年の工事期間で再建され資料館となっている。

Cs10 Re, 15p.

Reference : 原口 聡 (2001). 原城攻城戦の一考察—熊本半を中心に—. 人文学論叢 (愛媛大学), 3, 26-40.

Keywords : 幕府軍, 一揆勢, 細川忠利, 鍋島勝茂, 松田信綱, 兵糧攻め, 総攻め,

Abstract : 本稿は、幕府軍と一揆勢との原城攻防戦について、幕府軍側の見地からアプローチした研究である。その結果、次の 3 点が明らかになった。①幕府軍側は兵糧や攻城道具の大部分が自弁だったため、とりわけ熊本藩は、多大な負担を強いられて苦境に立たされることになった。②細川忠利と鍋島勝茂が兵糧攻め継続論を退けて主戦論を訴え、その主張を松平信綱が了承して総攻めが会議で決定された。③一揆勢に対する幕府軍による兵糧攻めは貫徹されたとはいえないところがあり、幕府軍を取り巻く情勢が逼迫して総攻め b の決定に至ったと考えられる。

Cs11 Re, 27p.

Reference : 山村亜希 (2010). 原城城下における港と町の景観—大江を中心として—. 千田嘉博・矢田俊文編『都市と城館の中世—学融合研究の試み—』, 高志書院, 333-359.

Keywords : , 歴史地理学, 大江城下町, ヴィスタ, ラグーン, 口之津, 南蛮貿易

Abstract : 本稿は、有馬氏が築いた原城をめぐる従来の研究で殆ど踏み込まれていない歴史地理学的観点を導入し、原城の城下町に相当する大江城下町の構造から有馬氏による都市経営の特質にアプローチした労作である。論の中心になっているのは原城天守へのヴィスタ（眺望）である。大江城下町の大手道からの眺望が不完全であるのに対し、島原半島南端に近い口之津からのそれは整っており、有馬氏の都市経営が南蛮貿易を重視していた様子がうかがえる。大江城下町が拡大しなかった要因としては、平野部の狭隘さに加えてラグーンの縮小を指摘できる。